

公開講演会

中東における宗教間対話の課題

日 時:2005年5月19日(木) 14:00-16:00
 会 場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
 講 師:ハッサン・アブ・ニマー (ヨルダン王立宗教間対話研究所所長・元国連大使)
 司 会:森 孝一 (同志社大学大学院神学研究科教授)
 主 催:一神教学際研究センター

講演要旨

アブ・ニマー氏は、現在彼が所長を務める王立宗教間対話研究所 (RIIFS: The Royal Institute for Inter-Faith Studies) の活動について述べた。同研究所は、1994年にハサン・ビン・タラール・ヨルダン王国皇太子のよびかけにより、アラブ世界におけるムスリムとキリスト教徒の相互理解を促進する目的で創設された。アブ・ニマー氏の講演では二つの主題が挙げられた。第1は、イスラーム諸国において政治的紛争と専制的な国家支配が背景になり相互集団間の寛容さが低下していること、またイスラエル-パレスチナ紛争の根本にあるのが歴史的・社会的不正義であるということである。第2は、地域における宗教間対話の挑戦と責務が、地域を越えた危機的状況における宗教の役割に対する無理解との関連で顕著になってきたことである。

近年のアラブ・キリスト教徒人口の減少は、地域における危機的状況の社会的影響を測る縮図と事例を提示していると同時に、宗教的共存への挑戦をもつくりだしている。日常生活の複雑で困難な状況は、個人の宗教の所属に関係なく、可能ならばよりよい生活が出来る環境を求めるか、または、政治やその他の世俗的機構には期待することのできない安全性やセクト的なシェルターの内にとどまることを強いている。このような多岐にわたる状況を把握するために、現在の中東のダイナミクスを説明する三つの歴史的元凶が提示された。

アブ・ニマー氏は、第1に1979年のイランにおけるイスラーム革命とその結果としてのイラン・イラク戦争を挙げた。当時のシーア派有力勢力は、イスラームを二分することに重点をおき、かつまた宗教の名における自己犠牲を導引するために、天国への手段として殉教を強調した。第2には、1982年のイスラエルによるレバノン侵攻とパレスチナ領占領への反動としての武力闘争運動の高まりである。第3には、これらの一連の結果としての自爆攻撃行為である。アブ・ニマー氏は、これらがイスラーム的教義の精神や語彙においては禁じられた自殺にあたり、非難されるとしても、同時に占領と不正義への反応としても見なければならぬことを強調した。これらの歴史的ファクターを悪化させているのは、市民から公的権利を剥奪し、人々の希望の障害となっている中東のいくつかの国における専制的

政府の支配である。また最近では、9・11事件の悲劇的影響が続いている。

これらのファクターは、サミュエル・ハンティントン(しかしバーナード・ルイスが先に提唱したもの)の「文明の衝突」に不当に強調されているような、イスラームやアラブを生来暴力的とする欧米のイスラーム・アラブ観に影響を及ぼしてきた。アブ・ニマー氏は、宗教がどのように地域紛争の触媒として、前述した社会的不正義の多岐にわたる真実を覆い隠すような幕となってきたかということを指摘し、本来は宗教的要因から発生したのではない人々の不正義への反応を悪魔化し、また地域の安全性と宗教的理解に有害な政治を正当化することに加担してきたと述べた。

中東における今日の紛争の社会的影響は、地域の異宗教間関係の危機につながる。アブ・ニマー氏は、三つの一神教徒が混在する環境においてムスリムとして育った自身の経験から、宗教的「寛容さ」の利点と限界を述べた。RIIFSによって進められている宗教間対話や創始者は、この限界を認識していると彼は言う。将来お互いの真の受容と共存が実現されるためには、少なくとも二つのことが整備される必要がある。第1には、多様な宗教におけるより微妙な差異を理解するために若者を教育することである。第2には、正義に焦点をあてた、今日の紛争における宗教のステイタスの明確化である。これは、支配的文化に対する少数派宗教の貢献に関する知識を広めることなどによっても可能である。これらの努力は、他の宗教と宗教共同体に対する敬意を持ちうるような社会を作る目的のために為されているのである。

(CISMOR編集補佐 ヴィクター・A・フェッソル)

プログラム

1. 挨拶:森 孝一
2. 講演:ハッサン・アブ・ニマー「中東における宗教間対話の課題」
3. 休憩
4. 質疑応答

中東における宗教間対話の課題

ヨルダン王立宗教間対話研究所所長・元国連大使

ハッサン・アブ・ニマー

Ambassador Hasan Abu Nimah



森教授、そして御臨席の皆様。今日、こうして皆様とご一緒できますことを、大変光栄に思います。本題に入ります前に、このすばらしい街、精神性に溢れた、信仰と歴史の街、京都に私をお招きくださった森教授にお礼申し上げます。

また森教授のおかげで、私は、この由緒ある礼拝堂でお話しさせていただくという栄誉に預かることができました。先ほどここに入って参ります時に、オルガンの曲が流れていましたが、私はそれを聴いて、50年前、ベツレヘムの学校に通っていた頃のことを思い出しました。私が通っていた学校は、聖誕教会の直ぐ裏手にありましたので、寒い日や雨の日には、よく近道をして、教会を通して学校に行ったものです。教会の入り口から入って裏口に抜けるたびに、いつも祭壇が目に入りましたが、その時、よく流れていたのが先ほどの曲なのです。

私はその学校を1955年に卒業し、ベイルート・アメリカン大学に進学しました。この大学は、アメリカ合衆国のキリスト教伝道団体によって19世紀に設立され、当初はシリア・プロテスタント大学(Syrian Protestant College)と呼ばれていましたが、後に、現在の名前に変わりました。在校生は大学の歴史あるチャペルで行われる礼拝に、週に2回、出席することになっていました。その礼拝の時にも、先ほどの音楽が流れていたことを覚えています。

最初にこのような思い出話をさせて頂きましたのも、50年前の当時ですら、ムスリムは宗教の違いなど気にしていなかったことを思い出したからです。当時、ムスリムは、自分がキリスト教徒やユダヤ教

徒とは別の人間だと感じていなかったのです。アメリカン大学はベイルートにありますから、当然、様々な宗派の学生が集まってきます。ムスリムもいれば、キリスト教徒もユダヤ教徒もいました。私はムスリムですが、学生時代の4年間、週2回の礼拝に出席することに何の違和感も感じなかったのです。

このことは、当時の人々が平和に共存していたことの一つの証です。しかし、それと同時に、その後には発生し、今や耐え難いほどまで悪化した状況が、決して宗教的な要因によるものではないことの証拠でもあるのです。そこで今日は、このテーマで話を進めさせていただきたいと思います。

現在の状況は、ムスリムがキリスト教徒に敵対しているわけでも、キリスト教徒がムスリムに敵対しているわけでもありません。また、ムスリムとキリスト教徒が共にアラブ人である場合には、彼らがユダヤ教徒と敵対しているわけでもないのです。人間は身の危険を感じると、以前の状態に逆戻りして、自分の属する共同体という殻に閉じこもってしまうものです。現在起こっているのは、単にそういうことなのです。

おそらく、様々な要因が絡み合った結果、ムスリムはイスラームに、そしてキリスト教徒はキリスト教に、それぞれの救済を求めるようになったのでしょう。そのために、宗派の違いがこれまで以上に浮き彫りになったというわけです。

リベラルな民主国家では、すべての国民がその国の法律によって保護され、自らの権利と義務を

理解しています。そのため、一族、宗教団体、家族、部族に頼る必要がありません。国が自分たちの安全を保障してくれることが分かっているからです。

しかし残念ながら、前世紀の中東において、ほとんどの地域でリベラルな民主国家は存在しなかったと言っても過言ではありません。そして現在も依然として開発は進まず、民主化も遅々として進んでいないのです。

その結果、というか、それに加えてと言った方がいいのでしょうか、ムスリムが多数派を占める中東諸国のほとんどで、少数派のキリスト教徒が、おそらくかつて感じたことのないほどの不安を感じるようになったのです。

そこで、ご参考までに、アラブ諸国におけるキリスト教徒の割合をお教えしましょう。ただし、今からご紹介する数字はあくまでもおおよその数字です。ほとんどのアラブ諸国には、そこに住むキリスト教徒の正確な数を明らかにした信頼できる統計などないのですが、とりあえず大まかな数字をご紹介しますと、まずエジプトでは6%から10%、イラクは3%から5%、ヨルダンでは3.2%となっています。このヨルダンの数値は正確なものと思われます。レバノン約30%、パレスチナ1.4%未満、スーダン5%、シリア同じく5%、そしてイスラエルでは1.7%となっています。

さて、ここ数年のパレスチナ情勢、または中東情勢全般の影響を受けて、これらの数字がどの程度減ってきたのか、あるいはそもそも変化しているのかについては、データ不足のためにはっきり申し上げることができません。

しかし、中東のキリスト教徒が減少していることは確かです。彼らの多くがあの地では暮らしていけないと感じ、欧州各国、アメリカ、オーストラリア、あるいはもっと住みやすい生活が望めるそれ以外の国へ移住しているのです。

ここで誤解のないよう申し添えておきますと、ムスリムも、チャンスがあれば中東を離れたいと思ってい

るのです。しかも、理由はキリスト教徒の場合と全く同じで、あの地では暮らしていけないと考えているからです。他の場所でもっと楽に暮せるのであれば、そうしたチャンスを見逃す手はないというわけです。

ただしキリスト教徒の場合と唯一違う点は、ムスリムが中東を離れても、何ら大きな影響があるわけではないということです。と言いますのも、アラブ・中東地域で多数を占めているのが彼らだからです。

ところがキリスト教徒の数が減少しているという現実、中東の社会構造が崩壊しつつあることの警告として、厳粛に受け止められるべきです。なぜならアラブ諸国(ここでは宗教的表現を使いたくないので、「イスラーム諸国」とは呼びません)におけるキリスト教徒の存在が、この地の文明にとって常に欠かせないものであり、歴史の一部だからです。そのため、彼らの数が減少することは、アラブ文明そのものにとって危険なことなのです。

したがってこれは、何らかの取り組みを必要とする重要な問題です。そして中東の指導者の中に、適切で十分な措置を講じなければ、キリスト教徒の流出はますます増えていくということにいち早く気付いた人物がいました。それが、わが国のエル・ハッサン・ビン・タラール殿下なのです。

殿下は、既に1970年代には、キリスト教徒流出問題に取り組む必要性、さらにはアラブの文化と文明に対するキリスト教徒の偉大な貢献を認める必要性を訴えておられました。

殿下はまず、宗教を始めとする各界の指導者達に対し、当時、ご自分が「宗教間対話」と名づけられた対話を呼びかけました。

現在では、数え切れないほどの組織が宗教間対話に取り組んでいますが、この先駆者がエル・ハッサン・ビン・タラール殿下なのです。

殿下の呼び掛けは、特に難しい課題への取り組みを促すものでもありました。すなわち、ユダヤ教徒との対話です。当時、イスラエルが建国された直後であり、アラブ人とユダヤ人が断絶状態にあった

ことを考えれば、これは非常に大きな、また勇敢な試みでした。

殿下のお考えは、パレスチナでの出来事やシオニズム運動が、すべてのユダヤ人が原因だと考えてはいけないというものでした。なぜなら、世界中のユダヤ人がこの運動を支持していたわけではないからです。

また、ユダヤ人に対する固定観念に警鐘を鳴らし、アラブの知識人、およびキリスト教やイスラームの指導者達に、ユダヤ教指導者との対話の扉を開くように呼びかけられました。宗教指導者同士の対話が政治的緊張を緩和し、政治的和解に向けた土台作りに貢献すると考えたからです。

その後、宗教間対話という試みは盛んに行われるようになり、キリスト教、イスラーム、そしてユダヤ教の指導者などが一堂に会した会議が、ローマ、ジュネーブをはじめとする世界各地で開かれています。

さらに殿下は、1990年代初めに、キリスト教研究の専門機関を早急に設立する必要性に気付きました。

殿下によれば、西側諸国には、イスラームや東洋文化の研究機関が多数存在するにもかかわらず、中東、つまりアラブ地域にはキリスト教の研究機関が一つもないのです。殿下は、こうした研究機関の設立を思いたち、その結果、1994年に誕生したのが、ヨルダン王立宗教間対話研究所(RIIFS)です。この研究所の歴史については、お手元のプログラムで簡単にご紹介しております。

RIIFSは、1994年、つまり今から11、12年前に活動を開始した組織で、そもそもの目的は、文学、研究、知的活動、教育、報道、政治をはじめ、その他の数多くの領域におけるアラブ文明へのキリスト教の貢献の歴史を明らかにすることにあります。この目的に関しては、過去10年間における講義、ワークショップ、シンポジウム、セミナーの開催や書物の出版を通して、かなりの成果を上げることができたものと自負しております。

最近では、キリスト教徒による貢献、および前世

紀に特筆すべき功績を残したキリスト者を網羅した人名辞典の第1巻を刊行しました。現在は第2巻の刊行に向けて準備を進めています。また、これとは別に、中東およびアフリカ諸国におけるキリスト教に関する本を、数冊、出版しております。これらの出版物に関しては、本日のプログラムでお知らせしましたRIIFSのウェブサイトでご覧頂けます。

RIIFSでは、紀要も英語版を年2回、そしてアラビア語版を年4回刊行しております。これら紀要では、主に宗教間会話に関する研究と、中東史におけるキリスト教の貢献の意義に関する研究を取り上げています。

これは読者の反響とフィードバックを見た結果として、申し上げられることなのですが、私どものこうした活動によって、キリスト教徒に大きな変化が生まれました。中東地域への自らの貢献を知った彼らは、自分たちの存在の大きさに気付き、自分達がこの地域に住み、この地域の一員であることを実感するようになったのです。かつては多くのキリスト教徒が失望感を抱き、他の場所に救いを求めるしかないのではないかと考えていました。

将来に向けて、RIIFSでは更に大々的な計画を検討しております。その一つは、教育に影響を与える活動の実践です。ムスリムは、自分の宗教だけでなく、他の宗教を理解することで寛容の精神を実践することができる、というのが私達の信念です。ファナティズム(狂信)は、たとえどこで起ころうとも決して健全なものではなく、むしろ異常なものです。真の信仰を持つ者がファナティックであることなどありえないのです。なぜなら両者が両立するはずなどないのですから。

ところで、「^{許容}Tolerance」はよく使われる言葉ですが、殿下が警告するように、「受け入れられないものではあるが、度量は大きいので許容する」という意味もあるという点で、あまり好ましい言葉とは言えません。殿下が意図しているのは、私達がお互いを許容するのではなく、受け入れ、敬い、理解する

ことなのです。

私達は、より良い教育を通じて、ムスリムであること、あるいはキリスト教徒であるということの意味を人々に理解してほしいと願っています。ヨルダンにはムスリムとキリスト教徒しか住んでいませんが、中東の他の国にはユダヤ教徒も住んでいます。つまり私達は、ムスリムであるからといって(神を礼拝する方法や、神に真理を求める方法は違うかもしれませんが)、他の宗教の信者よりも優れているとか劣っているというわけではないということを、教育を通じて若い人達や子供達に伝えることができるのです。

この点に関して、非常に単純ではあるけれど、時に、いや常に私たちが思い出すように努めなければならない一つの事実があります。

その事実とは、たとえば私が、「お前はなぜムスリムなのか?」と自問した時に、「両親がムスリムだったからで、他に選択肢がなかった」と答えるということです。この神聖な場所にお集まりの方々には別にしても、世界的に見ると、私のように答える人がほとんどではないでしょうか。親から受け継いだ信仰を後になって自分の意志で変える人は皆無に近いのです。

今更言うまでもないことですが、世界の三大一神教において、美德とされていることはほとんど同じです。また、悪徳とされていることや禁止されていることも、ほとんど同じなのです。

私はクルアーンだけでなく、新約聖書も旧約聖書も読みますが、これらの聖典を読むたびに、三大一神教のルーツは同じだという思いを強くします。

私が通った地元の村の小学校では、イスラームこそ唯一の正しい宗教なのだと教えられました。他の宗教はみな間違っているというのです。その頃の私はそれを信じていました。

その後、ベツレヘムの中学校に進学しましたが、ベツレヘムは、キリスト教徒とムスリムが共存する街です。私の村にはムスリムしかいませんでした。中学校の宗教の授業では、生徒の過半数がムスリムという場合、キリスト教徒の生徒は教室を出て、他

の授業を受けるように言われました。逆にキリスト教徒が過半数を占めた場合は、ムスリムが教室を出て、他の授業を受けるのです。

村のあの小学校の教師が、今、何を教えているのか分かりませんが、以前と同じことを教えているとしても、私は驚きません。また、クラスで少数派になったキリスト教徒やムスリム教徒が宗教の授業を受けられないのは、他のどこの学校でも同じではないかと思います。しかし、宗教の授業になっても教室を離れず、自分の信仰と違う宗教について学ぶ方がいいのではないのでしょうか? 今の私に言えるのは、宗教を学校で教える場合、宗派を問わずすべての生徒に宗教について教え、それに関する正確で客観的で、しかも科学的な知識をすべて身につけさせるのが一番だということです。

宗教の授業を廃止した国もあります。アメリカ合衆国も、そうした国の一つだと思います。このような方針の是非は分かりません。しかし、方法を誤らなければ、学校で宗教を教えることは必ずしも悪いことではないと私は思っています。信仰が私達の存在と切り離せないものだという点については、皆様にも納得していただけるものと信じています。

何も信じない人、何に対しても信仰の念を抱かない人などいないでしょう。つまり宗教は、私達が神との関係において実際に信仰の念を示す方法なのです。

もし、信仰を持っていることにおいて同じであるなら、たとえ神を崇拝する方法や神の教えを受ける方法は違っても、お互いを拒絶したり、認めてはならないということはないはずです。中東では、過去60年間にわたって政局が混乱したため、人々は宗教に救いを求めるようになりました。私は、これ自体を嘆かわしいことだとは思いません。なぜなら、先ほどもお話ししましたが、宗教、さらに言うなら信仰は、私達の存在と生活に欠かせないものだからです。

しかし、信仰を持つと言っても、純粋にその教えを信じ、その教えを積極的に、また建設的な方法で

実践する場合と、目の前の問題を解決したいがために宗教に救いを求める場合では大きな違いがあります。宗教は薬ではありません。そして、たとえ薬だとしても、応急薬のような存在ではないのです。

現在、特に西側諸国では、多くの人々が、宗教、とりわけイスラームを、信仰を実践する手段ではなく、厄介な問題だと思っています。

こうした人々は、ムスリムと言えば、アラブ人を思い浮かべ、アラブ人と言うと、イスラエルに敵対していると考えます。そのため、ある単純な事実を見落としてしまうのです。その事実とは、アラブ人の中にもキリスト教徒はいるものの、彼らは、イスラエルの不当な行為に対して、ムスリムのアラブ人と同じように憤慨しているということです。

今日は、政治の話を極力避けてきたのですが、近年、宗教が槍玉に挙げられている理由をわかっていただくうえで、政治的背景について少しご説明させて頂きたいと思います。宗教が注目を浴びるようになった要因としては三つあります。一つ目は、1970年代後半にイランで起こったイスラーム革命の結果、ホメイニー師による聖職者支配が始まったことです。ホメイニー師がイランに宗教政権を樹立すると、8年にわたるイラクとの戦争が勃発します。この過程で、ムスリムの中でシーア派が台頭するようになります。それまでは宗派にかかわらず、イスラームの信者がすべて、ムスリムと呼ばれていましたが、ここきて、シーア派とスンナ派の違いが意識されるようになったのです。

その結果、中東の他の国でも、シーア派が大きな力を持つようになりました。たとえばレバノンでは、シーア派が大きな政治・宗教勢力となっています。

最近、戦争終結後のイラクでも、多数派を占めるシーア派が、政治と宗教において大きな力を持つようになりました。

1982年のイスラエルによるレバノン侵攻の際、イスラエルの侵攻と一時的占領に対する抵抗運動の先頭に立ったのがシーア派で、ヒズブラーはこうし

た状況下で結成されたのです。

1991年のマドリード中東和平会議で始まった中東和平プロセスが、占領下のパレスチナで起こった2000年の暴動で頓挫した結果、また、1987年にパレスチナで最初に抵抗運動が始まったことを受けて、ハマース、ジハード・イスラミーヤ、そしてヒズブラーといった名前で見られるイスラーム原理主義組織が誕生しました。

1980年代、イラクとの8年にわたる戦いの中で、イランは兵士の信仰心に訴えました。このことから、西側諸国ではある説が広まりました。すなわち、最前線に地雷除去機の代わりに駆り出されるイランの子供達は、そうやって死ねば天国に行けると吹き込まれ、洗脳されているということです。

こうした誤解に拍車をかけたのが、1982年、イスラエルのレバノン侵攻を受けて生まれた自爆テロという現象です。

レバノンで初めて自爆テロを決行したのは、キリスト教徒の少女でした。しかし西側諸国では大多数の人が、ムスリムが自爆テロを決行する理由はただ一つ、殉教者として天国に行くためだと信じています。

ここで話ししておかなければならないのは、イスラームにおいて自殺は許されないということです。自ら命を絶つ者は天国に入れません。自殺は「ハラーム(haram)」つまり禁止行為であり、罪なのです。自殺は罪深い行為とされています。ですから、自殺した上に一般市民の命を奪うのは、二重の罪を犯すことになります。まず何よりも、自殺はムスリムにおいて罪とされていますし、無関係な一般市民を攻撃することも罪であり、それと同時に法律で禁じられた行為だからです。いかなる状況であれ、真のムスリムが、自殺によって天国に行けると説くはずはありません。たとえ正義のためであれ、自殺は許されないのです。

イラン・イラク戦争、1982年のイスラエルによるレバノン侵攻、パレスチナにおける抵抗勢力の誕生といった様々な要素が重なって、西側諸国では、イスラ

ムが暴力的な宗教だという印象が定着しました。

他にも大きな出来事が二つありました。一つ目は、皆さんもよくご存知の、9・11同時多発テロです。2001年にアメリカ合衆国で4機の旅客機がハイジャックされ、3機がニューヨークの世界貿易センタービルのツインタワーとワシントンのペンタゴンに激突し、さらにもう1機がペンシルヴェニアで墜落したのです。

ハイジャック犯全員がムスリムだったことが明らかになり、イスラームとその信者のイメージはますます低下しました。ムスリム、つまりアラブ人のムスリムがなぜこれほどの暴力行為に走ったのか、それを客観的に分析しようとする動きは起こりませんでしたし、そうした分析が許されるような状況でもありませんでした。こうした暴挙を正当化させないためにも、客観的分析がなされるべきだったのです。なぜなら、いかなる状況でも、あのような行為が許されるはずはないのですから。

一部のムスリムがなぜあのような行為に及んだのか、その理由を分析する必要があったと思います。また、こうした問題にどう対処すべきかについて、客観的なデータを基に検討することも必要でした。もちろん、あの日の惨事を引き起こした張本人達は、多くの人命を奪い、自らの命も絶ってしまいましたから、彼らが何を思ってあの犯罪を計画し、実行に移したのかも、今となっては知ることができません。

しかし、レバノンのヒズブラーや、パレスチナのハマースおよびイスラミック・ジハードが、なぜ戦い続けるのか、他国から非難される行為を続けるのか、その理由は分かっています。彼らがレバノンでは攻撃を受け、パレスチナでは占領下に置かれたからです。こういう言い方もできるかと思います。すなわち、私達は彼らの取った方法には反対しますが、少なくとも、彼らが明らかに許されない行為に走った理由は分かります。

アメリカの著名な思想家達は、「テロとの戦い」に勝つため、言い換えるなら世界からあのような残虐行為を撲滅するために役立つ分析をせず、「文明

の衝突」という概念を提唱することで、この問題の本質を見えなくしてしまいました。

「文明の衝突」という概念を初めて提唱したのはサミュエル・ハンチントンではなく、著名なイスラーム・中東史の専門家、バーナード・ルイスです。

近年、彼は多くの著書や論文を発表していますが、その中で現在の状況については、西側諸国に対するムスリムの復讐だと分析しています。歴史上の地位を西側キリスト教社会に奪われたことに対する復讐だということです。彼によれば、暴力はイスラームとアラブ文化の本質を成すものと言うのです。

ルイスのこの主張が正しいとするなら、この世にアラブ人とイスラームが存在する限り、暴力とテロがなくなることはないということになります。もちろん、これが正しいはずはありません。論理的でも合理的でもありませんし、現実的でもないと思います。

以上、私が皆さんにお伝えしたかったことが、おわかりいただけたでしょうか。最後に、私が言いたかったことを簡単に要約させていただきたいと思います。

中東が様々な問題を抱え、政治的混迷に宗教が関与するようになった発端は、この地に深刻な不正義をもたらした最近の状況にあるのです。

宗教間対話を提唱する者として、私達は、二つの方法でこの問題に取り組む必要があります。一つは、この問題に関するルイスのような誤った認識を改めることです。ある程度の正義が回復されれば、宗教問題も、さらには私達の抱える問題に宗教が関与することもなくなるはずで

す。もう一つは、現在よりも未来に関するものですが、子供達に適切な教育を施すことです。具体的には、宗教は、方法こそ違え、同じゴールを目指しているということを教えるのです。

つまり、一方で現在と過去の問題に取り組みながら、もう一方で、より良い、より平和な未来を目指す必要があるということなのです。

ご清聴、誠にありがとうございました。